様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２３３０１８７

研究課題名（和文）関係性攻撃と心理社会的適応との関連についての生涯発達心理学的研究

研究課題名（英文）Life-long developmental study in the relationships between relational aggression and psycho-social adjustment

研究代表者
濱口　佳和（HAMAGUCHI, Yoshikazu）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：２０２７２２８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　14,500,000円、（間接経費）　4,350,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では8の研究で小，中，高，大，就労者の全ての年齢段階で，関係性攻撃加害傾向を行動の型ごとに測定可能な多次元性の尺度を作成し，①その信頼性・妥当性の検討と性差の検討，②ストレス反応などとの心理社会的不適応との関連，③パーソナリティ要因との関連の検討などを行った．従来，欧米では小学生を対象として，一次元的に行動を測定する研究が多かったが，大学生・社会人も含めて，関係性攻撃が多次元的に測定できること，関係性攻撃加害傾向のある人は心理的ストレスを経験しやすく，関係性攻撃は人格障害傾向と関連があることが明らかにされた．大人の場合でも，被害者だけでなく加害者自身にとっても有害性が確認された．

研究成果の概要（英文）：In this study, eight researche including elementary school children,junior-high school & high school students, university students, and workers as participants were conducted. The purposes were, a. construction of multi-dimensional scales for relational aggression(RA) and to test their reliability and validity, b. to investigate the relationship between RA and psychological maladjustment such as psychological stress responses , and c. to investigate the relationship between RA and personality disorder tendencies such as psychopathy and narcissism. The researches revealed that RA is reliably and validly assessed as multidimensional construct, that high RA people tend to experience much psychological maladjustment than low RA people in every developmental stage, and that in antagonist's personality disorder tendencies. through the entire studies, the fact that RA is malicious behavior not only for children but also adults were found. One preventive educational program was developed.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：関係性攻撃　多次元性尺度　心理的ストレス反応　サイコパシー傾向　自己愛性人格障害傾向　反応的攻撃性　就労者　大学生

1. 研究開始当初の背景

関係性攻撃の実証的研究は 1995 年頃から北米大陸を中心に，多様な文化圏で行われるようになった.児童期を中心に研究が行われ,身体的攻撃同様個人内での安定性が高く，介入なしでは改善されない行動であること,拒否児や敵味方児に多く,人気児では少ないこと，抑うつなどの内在化問題と関連があること，関係性被害場面での社会的情報処理（敵意帰属バイアス）に強く規定されることなどが明らかにされている.(Crick,1995;Crick,Grotpeter,& Bigbee, 2002;Crick,Ostrov,& Werner,2006;Crick & Werner,1998)．青年期以降の研究は少数で,欧米でも，青年期以降の関係性攻撃の生起メカニズムや，それに関連する個人的属性，関係性攻撃と心理的不適応やパーソナリティ障害傾向との関連など検討されていない.

２．研究の目的

上記の研究の状況に鑑み本研究では，①児童期，青年期，成人期の３つの発達段階に亘って，②関係性攻撃を多次元的に測定可能な尺度を開発し，その信頼性と妥当性を検討すること，③関係性攻撃と心理的不適応との関連を検討し，④関係性攻撃加害を規定するパーソナリティ要因を検討する，⑤関係性攻撃の個人内における生起メカニズムの検討，⑥関係性攻撃低減のための心理教育的プログラムの開発，以上 6 点を目的とする．これらの目的を達成するために，後述の 8 研究を行った.

3. 研究の方法

研究 1～研究 7 は質問紙による調査が実施された．各研究で使用された尺度は4．研究成果で詳述する．研究 1, 2, 3, 5 で各発達段階用の多次元性関係性攻撃尺度の開発が行われている．その項目プールの作成は，2010 年の時点で内外で開発済の関係性攻撃測定尺度の項目といじめ被害者の手記などの記述から関係性攻撃に該当する手口を抜粋し，行動の型を整理分類．A.　噂の流布，B．陰口，C．操作，D．同調，E．社会的排除，F．無視，G．負のスティグマの 7 カテゴリーが設定された（具体的行動数が少ないＧは後に除外）．この関係性攻撃のカテゴリーを発達段階間で共有しつつ，具体的な項目プールはそれぞれの発達段階ごとに作成した.児童用 80 項目，中学･高校生用 73 項目，大学生 73 項目，就労者 63 項目となった.

４．研究成果

【研究１】児童期における関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討.

[研究 1-1]児童用多次元性関係性攻撃尺度(教師評定)の作成.

(1)目的：児童用多次元性関係性攻撃尺度（教師評定）(MRAS-ET)の作成.

(2)方法：*A.調査対象者*　小学校教師 101 名（男性 52 名，女性 49 名）*B.調査内容*　①児童用関係性攻撃尺度項目案：80 項目，5 件法.

(3)結果と考察：MRAS-ET の構成：MRAS-ET 原案 80 項目について，平均値上位 22 項目からＡ～Ｆの各カテゴリ上位３項目ずつ合計 18 項目を残し，探索的因子分析を実施．2 を抽出，「孤立化」と「追従的関係性攻撃」と命名(因子間相関．71)．α係数はそれぞれ，.93,．90.

[研究 1-2]児童の関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討.

(1)目的：MRAS-ET の関係性攻撃２側面（孤立化･追従的）と CBCL-TRF の抑うつ･不安，非行行動との関連を検討.

(2)方法：*A.手続き*；今年度担任の児童の中から，①仲間から人気の高かった児童と②仲間から嫌われていた児童を各一名想起させ，MRAS-ET，ＣＢＣＬ-ＴＲＦ（抑うつ･不安短縮尺度，非行的行動尺度），ＣＳＢＳＴで評定を求めた．*B.質問内容*；①MRAS-ET，②CBCL-TRF，不安抑うつ下位尺度，非行的行動尺度．③.CSBS-T，Crick（１９９６）の尺度の日本語版(Kawabata, et al.)15 項目．*C.対象者*　全国の小学校教員 107 名．87 名分を分析．男 58 名，女 29 名.

(3)結果と考察：重回帰分析：人気児では追従的関係性攻撃が不安･抑うつと，孤立化が非行的行動と正の有意な関連を示したが，拒否児では追従的関係性攻撃が非行的行動と正の関連を示すにとどまり，抑うつ･不安と関係攻撃の間には有意な関連が見られなかった.

【研究 2】中学生における関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討.

[研究 2-1]　中･高生用多次元性関係性攻撃尺度(教師評定)の作成.

(1)目的：中高生用多次元性関係性攻撃尺度（教師評定）(MRAS-JHT)の作成.

(2)方法：*A.対象者*　中学校教員 57 名（男 41 名，女 16 名），高校教員 92 名（男 70 名，女 22 名），計 149 名．*B.調査内容*　①MRAS-JHT 項目案：73 項目．関係性攻撃が目立つ生徒を 1 人想起させ，その生徒について回答するよう求めた.

(3)結果と考察：①MRAS-J&ST の探索的因子分析：A～F までの各領域の項目中，平均評定値が最も高いものの中から，3項目，合計 18 項目を選定，因子分析を実施.2因子抽出.第 1 因子は「孤立化」，第2因子は「噂の流布」と命名．α係数はそれぞれ，.89,.90.

[研究 2-2]中学生の関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討.

(1)目的：中学生を対象に，多次元的に関係性攻撃の個人差を測定し，①併存的妥当性の検討，②人気児・拒否児における関係性攻撃と非行行動，抑うつ・不安との関連の検討.

(2)方法：*A．調査対象者*：全国の中学校教員 107 名．回答に不備のない 85 名(男 63，女 22)分を分析．*B.調査内容*：①多次元性関係性攻撃尺度（教師評定・中高生版：MRAS-J&HT）：

孤立化，噂流布．②CBCL-TRF：抑うつ・不安尺度，③CSBST：Crick（1996）の日本語版．
C.実施手続き：今年度受け持った学級の生徒達の中から，仲間から人気の高かった生徒，仲間から嫌われていた生徒をそれぞれ一人想起させ，性別，学年を回答させた後，MRAS-J&HT，CBCL-TRF，CSBST で評定．
(3)結果と考察：①いずれの下位尺度も CSBST の関係性攻撃と正の関連．②重回帰分析：人気児では孤立化が不安・抑うつと，噂流布が非行的行動と正の関連が見られ，拒否児では噂流布が非行的行動と正の関連を示すにとどまり，抑うつ・不安と関係攻撃の間には有意な関連が見られなかった．

【研究 3】高校生における関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討．

[研究 3-1]自記式高校生用多次元性関係性攻撃尺度の作成．

(1)目的：高校生を対象とした自記式の多次元性関係性攻撃尺度を開発し，その信頼性と併存的妥当性の検討を行う．
(2)方法：*A.調査対象者*：全国の高校 1～3 年生 203 名．*B.調査内容*：①多次元性関係性攻撃尺度(自記式高校生用:MRAS-SH)原版，②関係性挑発場面における社会的情報処理・応答的行動質問紙：濱口他(2008)．③敵意攻撃インベントリー(秦,1990)．
(3)結果と考察：①社会的情報処理の因子分析：MRAS-SH 全 33 項目について探索的因子分析実施．3 因子解採用．第 1 因子は「関係操作」，第 2 因子「無視･排除」，第 3 因子噂の流布」と命名．②信頼性･併存的妥当性：α係数.79～.95，身体的攻撃を統制してもなお.35～.50 の中程度の有意相関を示し，併存的妥当性確認．

[研究 3-2]高校生の関係性攻撃傾向が関係性侵害場面における社会的情報処理と応答的行動に与える影響の検討．

(1)目的：高校生の関係性攻撃と，仲間による関係性挑発場面における被害者の社会的情報処理ならびに応答的行動との関連性を検討する．
(2)方法：研究 3-1 と同じ．
(3)結果と考察：①社会的情報処理変数の因子構造の検討：探索的因子分析を実施，4 因子解を採用．第 1 因子「主張肯定評価」，第 2 因子「攻撃肯定評価」．第 3 因子「関係維持 SIP」，第 4 因子「報復的 SIP」．α=.70～.82 で，高い信頼性確認．②応答的行動の因子分析：探索的因子分析を実施し，2 因子解採用．第1因子応答的攻撃行動，第 2 因子主張行動．α係数は.81，.83．③パス解析：a.攻撃行動の 60%，主張行動の 50%がモデルによって説明された．b.関係操作は，直接的に関係性侵害場面での応答的攻撃行動を規定するとともに，攻撃肯定評価と報復的情報処理の 2 つの社会的情報処理変数を媒介して間接的に規定することが明らかになった．

【研究 4】大学生における関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討．

[研究 4-1]多次元性関係性攻撃尺度(大学生用)の作成．

(1)目的：大学生を対象に関係性攻撃の個人差を多次元的に測定可能な尺度を作成し，因子構造，信頼性，妥当性を検討．
(2)方法：*A.調査対象者* 下記の 4 種類の標本集団に対して，後述の多次元性関係性攻撃尺度(大学生用)の原版を実施．サンプル A：4 校の男女大学生 153 名(男 72，女 81)．サンプル B：サンプル A と同じ 4 校の大学の男女大学生 155 名(男 98，女 57)．サンプル C-1：国立大学 1 校男女大学生 179 名(男 65，女 114)．サンプル C-2：NTT レゾナンス社にモニター登録している全国の 4 年制大学男女学生 102 名(男 45，女 57)．
B.調査内容 ①多次元性関係性攻撃尺度(大学生用：MRAS-U)原版 47 項目．全サンプル共通．②各サンプル固有の心理尺度：サンプル A：Kiss18(18 項目)，敵意的攻撃インベントリーの「間接的攻撃」と「言語的攻撃」，Lets-2 の「アガペ」，BAQ の「身体的攻撃」，多次元的共感尺度の「他者指向」，「視点取得」．サンプル B：向社会的行動尺度(大学生版)，BAQ の「短気」，「敵意」，自記式能動的･反応的攻撃性尺度（大学生版）の「他者支配」，「欲求固執」，友人関係尺度「気遣い」．サンプル C：被受容感･被拒絶感尺度，PHRF(短)，敵意的攻撃インベントリーの「言語的攻撃」，BAQ の「身体的攻撃」．
(3)結果と考察：①MRAS-U の因子分析：探索的因子分析実施．第 1 因子「関係拒否」，第 2 因子「操作」，第 3 因子は，「対恋人関係性攻撃」，第 4 因子「陰口」と命名.②α係数，関係拒否.88，操作.87，対恋人.86，陰口.79．③併存的妥当性：MRAS-U のいずれの下位尺度も，間接的攻撃と.27～.64 の正の有意相関，「対恋人 RA」以外は，言語的攻撃，身体的攻撃とも.27～.37 の正の有意相関．短気，敵意，他者支配といった攻撃行動を導く内的要因とも.19～.47 の正の有意相関．また攻撃行動を抑制することで知られている共感とは負の相関が見られた．以上から，MRAS-U の併存的妥当性は確認された．

[研究 4-2]大学生の関係性攻撃と心理的ストレス反応との関連．

(1)目的：大学生の関係性攻撃と心理的適応との関連を検討する．心理的適応の測度には，他者からの被受容感･被拒絶感と，心理的ストレス反応を取り上げる．
(2)方法：*A.調査対象者* 国立大学 1 校 181 名と全国の 4 年制大学学生 102 名，合計 277 名(男 110，女 171)．*B.調査内容* ①MRAS-U，②被受容感尺度･被拒絶感尺度；杉山･坂本(2006)，③ストレス･チェックリスト･ショートフォーム(PHRF)今津他(2006)，不安･不確実感，疲労･身体反応，自律神経症状，うつ気分･不全感，④敵意攻撃インベントリー言語的攻撃，⑤BAQ 身体的攻撃．
(3)結果と考察：①重回帰分析；被拒絶感に対して操作，疲労身体反応に対して対恋人関係性攻撃，うつ気分不全感に対して関係拒否)が，それぞれ身体的攻撃，言語的攻撃，性別を統制してなお，独自の正の関連を示した．心理的不適応に対して，関係性攻撃の異なる側面が関連を

示すことが明らかになり，関係性攻撃を多次元的に測定することの意義が示唆された．②共分散構造分析：最も高い適合度が得られたモデルで,CFI=.871，RMSEA=.130．異なるモデルの検証が必要．このモデルでは，関係性攻撃が直接ストレス反応を規定することが示された．

[研究4-3]大学生の関係性攻撃を規定するパーソナリティ要因の検討．

(1)目的：特にサイコパシー傾向，反応的攻撃性，自己愛傾向に焦点を当て，これらのパーソナリティ要因と関係性攻撃との関連を検討する．

(2)方法：*A.調査対象者*：東北，関東，関西の 6 大学の学生 404 名(男 161，女 242，不明 1)． *B.調査内容*：①MRAS-U，②自己愛性人格目録(大石ら,1987；小塩,1998)の「注目・賞賛欲求」，「自己主張」，③日本版 BAQ(安藤他,1999)の「短気」，「敵意」．④日本語版一次性・二次性サイコパシー傾向尺度(杉浦・佐藤,2005)．

(3)結果と考察：①重回帰分析；「関係拒否」には自己愛，反応的攻撃性，サイコパシー傾向の全てが低いながらも正の関連を示した。「操作」は実利的な目標の達成や報復として，相手に関係性攻撃を加えるもので，これは女性より男性で多く，一次性サイコパシーの傾向，短気によって規定されている．「対恋人関係性攻撃」は，注目賞賛欲求，短気，一次性サイコパシー傾向によって規定され，特に注目賞賛欲求が反映する行動であることが明らかにされた．「陰口」は，注目賞賛欲求，敵意，二次性サイコパシーによって規定されることが明らかにされた．

［研究 5］就労者における関係性攻撃と心理社会的適応との関連の検討．

[研究 5-1]多次元性関係性攻撃尺度(就労者用：MRAS-W)の作成．

(1)目的：①多次元性関係性攻撃尺度（職場成人用）の作成と信頼性・妥当性の検討．

(2)方法：*A.調査対象者*：719 名（男性 357,女性 362）．サンプル A，214 名（男性 105，女性 109）．サンプル B，190 名（男性 95,女性 95）.サンプル C，315 名（男性 157,女性 158）．A,B,C の 3 サンプルには重複はない．*B.調査内容*；①サンプル A，MRAS-W 原版 63 項目，BAQ「短気」，「身体的攻撃」，成人用能動的・反応的攻撃性尺度（濱口,2008）の「他者支配」と「欲求固執」．②サンプル B，MRAS-W 原版，怒り持続尺度（渡辺・小玉,2001），HAI の間接的攻撃，言語的攻撃，MSE 共感性尺度の「他者指向的反応」「視点取得」(鈴木・木野，2008)，Kiss18(菊池，1988)．サンプル C,MRAS-W，BAQ の「短気」と「敵意」，「一次性・二次性サイコパシー尺度」（杉浦・佐藤,2005)），NPI(小塩,1998) の「自己主張」，「注目賞賛欲求」，「優越感・有能感」

(3)結果と考察：①MRAS-W の因子分析．第 1 因子は「孤立化」，第 2 因子「関係操作」，第 3 因子は「陰口/噂の流布」，第 4 因子は「無視」と命名された．②信頼性，α 係数は.80～.89，高い信頼性が確認された.③性差・年代差，孤立化は 50 代＜60 代，40 代＜20 代・30 代の順で，陰口・噂では，50 代・60 代<20 代,30 代,40 代の順で高かった．孤立化と関係操作では男性が高く，無視では女性が高かった．④併存的妥当性；BAQ（短気，身体的攻撃），成人用能動的・反応的攻撃性尺度（「他者支配」「欲求固執」），怒り持続性，HAI 「間接的攻撃」，「言語的攻撃」 のいずれの測度とも正の相関が示された．特に「間接的攻撃」とは，「関係操作」と「無視」でそれぞれ r=.43，.41 の相関．

[研究 5-2]就労者の職場での関係性攻撃と心理的ストレス反応との関連の検討．

(1)目的：就労者の職場での関係性攻撃と心理的ストレス反応との関連をパスモデルで検討．

(2)方法：*A. 調査対象者*：日本全国の就労者 410 名(男 197,女 213；20 代 79,30 代 82,40 代 83,50 代 80,60 代以上 86)*B.調査内容*：①MRAS-W，②被受容感・被拒絶感尺度；杉山・坂本(2006)．③職場のストレススケールのストレス反応尺度；小杉(2000),④敵意的攻撃インベントリー「身体的攻撃」，「言語的攻撃」，⑤関係性攻撃被害;田中(2008)の職場の迫害尺度の中の関係性攻撃被害に該当する 6 項目を抜粋．

(3)結果と考察：①パス解析：最も高い適合度は，GFI=.888,AGFI=.832,RMSEA=.090．このモデルでは，心理的ストレス反応の 51%が説明され，特に被拒絶感，被受容感が大きな関連を示した．被拒絶感に対して関係性攻撃，関係性攻撃被害が，言語性攻撃や身体的攻撃を統制してなお独自の有意な関連を示し，被受容感に対しては，関係性攻撃が，言語性攻撃や身体的攻撃を統制して独自の有意な関連を示した．就労者の場合，職場での関係性攻撃は周囲からの拒絶や受容の低下を通じて心理的ストレス反応を促進することが明らかになった．

[研究5-3]就労者の関係性攻撃を規定するパーソナリティ要因の検討(1)

(1)目的：職場の関係性攻撃と自己愛，反応的攻撃性，サイコパシー傾向との関連の検討．

(2)方法：研究 5-1 のサンプル C と同じ．

(3)結果と考察：①重回帰分析；男性の無視以外のすべてに亘って，利己的で冷酷な一次性サイコパシー傾向が正の関連を示した．特に関係操作は一次性サイコパシー傾向と強い関連があった．孤立化はこれに加えて敵意と衝動性の高さである二次性サイコパシーが正の関連を示し，陰口・噂でも同様に，一次性サイコパシー傾向に加え，敵意と二次性サイコパシー傾向が正の関連を示した．関係性攻撃の種類により，関連を示す人格要因が異なることが明らかにされた．

女性では，一次性サイコパシー傾向が関係性攻撃の 4 下位尺度の全てに亘って有意な正の関連が見らた.孤立化ではこれに加えて敵意が，陰口・噂では二次性サイコパシーが正の有意な関連を示すことが明らかになった．以上の様に，男女とも就労者の関係性攻撃には一次性サイコパシー傾向が深くかかわっており，同時に，性別と関係性攻撃の種類により，敵意や自己愛傾向も独自の寄与を示すことが明らかにされた．

[研究 5-4] 就労者の関係性攻撃を規定するパーソナリティ要因の検討(2)

(1)目的;境界性パーソナリティ障害傾向と関係

性攻撃との関連を検討する.
(2)方法;*A.調査対象者*:20 歳以上 40 歳以下の就労者 407 名(男性 105 名, 女性 302 名). *B.調査内容* ①多 MRAS-W (濱口ら, 2012:「孤立化」,「関係操作」,「噂・陰口の流布」,「無視」) ③境界性人格障害尺度 (田村・井上, 2009:以下 BPI)の「空虚感」,「幻覚・自我漏洩感」,「身体異常と自傷行為(自殺企図の経験を尋ねる項目を除外)」,「情動統制感喪失」 ④見捨てられスキーマ尺度 (ASQ:井合ら, 2010):「恒常的な見捨てられ・孤独」,「親密な関係によるしがみつき・同一視」,「他者からの行為に対するあきらめ」の 3 因子, ⑤日本版 BAQ の「身体的攻撃」⑥敵意的攻撃インベントリーの「言語的攻撃」.
(3)結果と考察:①BPI:男性では「孤立化」と「関係操作」に対して, BPI の「身体異常と自傷行為」がそれぞれ正の関連を示した. 女性ではすべての関係性攻撃の下位尺度に対して,「身体的攻撃」が,「孤立化」に対して BPI の「幻覚・自我漏洩感」が,「関係操作」に対して BPI の「身体異常と自傷行為」が有意な正の関連を示した.

【研究 6】少年院在院者における関係性攻撃加害・被害経験と現在のストレス反応との関連の検討.
(1)目的:少年院入院中の青年の入所前の関係性攻撃加害・被害経験が, 入所後の心理的ストレス反応に与える影響を回顧調査により検討.
(2)方法:*A.調査対象者* ある少年院に 2012 年 8 月から 2013 年 12 月までの間に入所し, 本調査に対する協力が得られた 97 名の青年(男子).
B.調査内容 ①フェイスシート:対象者の年齢と実施までの在院月数,②櫻井・小浜・新井(2005)の関係性攻撃傾向尺度. 少年院在院生向けに若干表現を修正して使用. 被害経験, 櫻井(2002)の中学生用関係性攻撃尺度から 7 項目を抜粋して使用. ③敵意攻撃インベントリーの「身体的攻撃」,④KiSS18 から対人関係の葛藤処理などに関する 5 項目. ②～④は,「入院する少し前のあなた」を想起させて評定. ⑤関係性侵害場面による社会的情報処理と応答的行動質問紙(濱口他, 2008). ⑥短縮版中学生用ストレス反応尺度 岡安他(1992;抑うつ・不安, 不機嫌・怒り, 無気力). ⑦青年用適応感尺度;大久保(2005)から「課題・目的の存在」,「被信頼・受容感」を抜粋して使用.
(3)結果と考察:パス解析;適応感には有意な関連なし. 無気力には関係性攻撃加害経験から直接正の有意なパスが, 不機嫌怒りには, 関係性攻撃加害→報復的情報処理→不機嫌・怒りという間接的なパスが認められた. 抑うつ・不安には, 関係性攻撃被害経験から直接正の有意なパスが見られた. 関係性攻撃加害経験からは関係維持情報処理に負の大きなパスが, 謝罪要請情報処理に正の中程度のパスが見られた.

【研究 7】高校生の自己観と社会的情報処理ならびに関係性攻撃との関連の検討(短期縦断的研究)
(1)目的:仲間による関係性侵害場面での高校生の応答的行動(報復的攻撃, 主張行動)に対して, 過去の関係性攻撃経験と相互協調的自己観が現在の社会的情報処理を媒介して与える影響を短期縦断的研究法で明らかにすることを目的とした.
(2)方法:*A.対象者* 高校生 103 名(1 年生 22, 2 年生 38, 3 年生 43 名;男子 39 名, 女子 64 名).
B.調査内容:第 1 回調査(2014 年 1 月);①対象別相互協調的自己観尺度(Kawabata, et al(unpublished), 対親友, 対家族,対仲間各 14 項目, 計 42 項目(5 段階評定). ②MRAS-H(濱口他,2013), 関係操作, 無視排除, 噂の流布. 第 2 回調査(2014 年 3 月) ①関係性侵害場面における社会的情報処理・応答的行動質問紙(濱口他,2008).②自記式多次元性関係性攻撃尺度(第 1 回目調査と同じ, 濱口他 2013).
(3)結果と考察:パス解析;関係性侵害場面での高校生の応答的行動は, 攻撃行動で 72%が, 主張行動で 57%が説明されることが判明. 応答的攻撃行動は, 1 か月前の関係性攻撃(陰口・噂)と正の有意な関連があり, 主張肯定評価, 報復的情報処理,関係性攻撃肯定評価, 顕在性攻撃評価といった現時点での情報処理変数により直接的に規定された. 一方, これらの情報処理変数は, 調査 1 の時点での対親友協調的自己観(主張肯定評価, 報復的情報処理, 顕在性攻撃評価)と関係性攻撃の関係操作(関係性攻撃肯定評価に, 顕在性攻撃肯定評価に)に有意な関連があることが判明. 主張行動については, 顕在性攻撃評価と説明・関係維持目標の 2 つの社会的情報処理変数が比較的大きな関連を示す一方で, 1 か月ほど前の対家族協調的自己観が低いながらも有意な直接的関連を示した.

【研究 8】中学生用いじめ防止プログラム「さわやか仲間づくりプログラム」の作成と効果の検証
(1)目的:中学生向けの関係性攻撃を含むいじめ予防プログラムを作成し, 効果を検証する.
(2)方法:*A.対象者*:埼玉県南部の一公立中学校 2 年生 1 学級(男子 30 名, 女子 30 名). *B.プログラムの概要*:通常の授業時間帯(45 分)を 3 時限用いて実施. 第 1 回「講義:人を傷つけないこころをめざして」:a.攻撃行動の概念の説明, b.いじめ被害による心の傷, など. ②第 2 回「演習 1:さわやかな自己主張」:a.アサーションの概念の復習, b.アサーションの種類, c.架空の挑発エピソードを用いた自己の応答的行動(漫画完成課題)の産出など, ③第 3 回:「演習 2 人を傷つける思考 VS アサーションの思考」, a.前回の復習, b.仲間から被害を受けた場面での社会的情報処理の測定, c.攻撃を導く思考とアサーションを導く思考の違い, d.「わざと」とそうでない時の手がかりの違い, e.アサーションできるための 4 つの教訓. *C.効果測定のための尺度* ①中学生用反応的攻撃性尺度(濱口,2007),「報復意図」,「怒り」,「外責的認知」, ②中学生用能動的攻撃性尺度(濱口,2005),「仲間支配欲求」,「攻撃有能感」,「攻撃肯定評価」,「欲求固執」, ③青年用主張性尺度の「肯定的自己表明」
(3)結果と考察①事前・事後の得点比較:高攻撃

群は報復意図，欲求固執，肯定的主張で1pt以上の低下．攻撃傾向群でも報復意図が1pt以上低下.低攻撃･主張群では外責的認知が 1.6pt 増加．特に攻撃性の高い群で攻撃性が低下する可能性が示唆された.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

1.関口雄一・濱口佳和(2014).多次元性関係性攻撃尺度(高校生用)の作成　筑波大学心理学研究,47,55-64.（査読有）

2．渡部雪子・濱口佳和(2014)．教師評定用多次元性関係性攻撃尺度(中高生版)の作成　筑波大学発達臨床心理学研究，**25**，21-32(査読無)．

3．関口雄一・濱口佳和(2014)．小中学生の知覚された仲間からの評価尺度の作成 筑波大学発達臨床心理学研究，**25**，11-20.（査読無）

4．Kawabata,Y.，Crick,N.R.，& Hamaguchi, Y.(2013)．The association of relational and physical victimization with hostile attribution bias，emotional distress，and depressive symptoms:A cross-cultural study. *Asian Journal of Social Psychology*，**16**，260-270.（査読有）

5.尾花真梨子・濱口佳和・江口めぐみ(2013)．児童の関係性攻撃と適応との関連の検討，筑波大学発達臨床心理学研究，**24**，35-42(査読無)．

6.桑原千明・関口雄一・濱口佳和(2013)．多次元性関係性攻撃尺度(教師評定・小学生版)の作成，筑波大学発達臨床心理学研究，**24**，27-34(査読無)．

7．渡部雪子・新井邦二郎・濱口佳和(2012)．中学生における親の期待の受け止め方と適応との関連の検討　教育心理学研究，**60**，15-22(査読有)

8.江口めぐみ・濱口佳和(2012)．他者配慮の観点を含めた児童の主張性と内的・外的適応との関連　心理学研究，**83**，141-147.（査読有）

9.中田千絵・濱口佳和(2011)．過去の関係性攻撃加害経験・被害経験の長期的影響の検討－回顧的方法による検証－　筑波大学発達臨床心理学研究,**22**,1－12（査読無）．

〔学会発表〕（計 33 件）

1.濱口佳和・櫻井茂男・渡辺弥生(2012.9.11)職場の勤労者の関係性攻撃を多次元的に測定し，その心理社会的適応との関連を検討日本心理学会第 76 回大会ワークショップ WS014.

2.Hamaguchi,Y.,Ishikawa,M.,Eguchi,M.,Sanko,Y.，Fujiwara,T.Obana,M.，Kuwabara,C.，& Sekiguchi,Y.(2012.3.9).An Investigation on the relationships between proactive-reactive aggressiveness and psycho-social maladjustment in Japan. *Society for Research in Adolescence 2011 Biennial Meeting*(Vancouver) Poster session.

〔その他〕

ホームページ等

http://hamaguchi-lab.org/report1-b.html

６．研究組織

(1)研究代表者

濱口 佳和(HAMAGUCHI, Yoshikazu)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：20272289

(2)研究分担者

石隈　利紀(ISHIKUMA, Toshinori)
筑波大学・副学長
研究者番号：50232278

櫻井 茂男(SAKURAI, Shigeo)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：50183819

大川　一郎(OHKAWA, Ichiro)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：90241760

岡田　昌毅(OKADA, Masaki)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：10447245

湯川　進太郎(YUKAWA, Shintaro)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：60323234

渡邊　弥生(WATANABE, Yayoi)
法政大学・文学部・教授
研究者番号： 00210956

戸田　有一(TODA, Yuichi)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70243376

渡部　玲二郎(WATANABE, Reijiro)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：80272102

松尾　直博(MATSUO, Naohiro)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：10302902

森　丈弓(MORI, Takemi)
甲南女子大学・人間科学部・准教授
研究者番号：00512154

金綱　知征(KANETSUNA, Tomoyuki)
甲子園大学・人間科学部・講師
研究者番号：50524518

(3)研究協力者

河端　良人（Kawabata, Yoshito）
ノースカロライナ大学・フェイスビル校・助教）
研究者番号：なし